宗家記録

諸方御内用往復書状扣

文化十三年
同十四年

六

94
1
49

準貴

宗家記録

諸方御内用往復書状扣

第六冊

文化十三年

仝 十四年

[illegible]

御内用

子正月元吉

御内用第六冊

以別紙ニ啓上候
殿様御前髪中ゟ御眼不被
為出ゝし候様子ゟ萬事被成下越候
然處茶ヲゟ御手洗ニ被為成候
御元服御整可被遊哉と存候時
三茶ヲ存候ニ付 給為成候
延御學候様子ニ而事ニ候

教行巻ノ五
紀伊国坊ニ而
右者今々之

御知入ニ被仰含候而内之縁之
御修補等ハ判前後ニ申唯抱ニ
手配ニ可相成候而之縁急ニ信候利
換ニ而達目録等ニも此勝ニ相成
可申候間ニ相通節ニ而御沙汰被遊候ハ
能々相考候而被及苦ニ而郡三等之
御順ニ可相成候而可申候月日

不可有之候条ニ至候通心得ニ被仰
縁節御取以ヲ一度及閲深候得
被仰候ハ候而御説ニ可申越候程ニ候

一御家相続之儀も

右被仰天神丸
被仰含候道も
右ハ又料被取
御知入ニ而事ニ而被仰天神丸
被仰ニ而相続
忠勤ニ而被仰候

第五

御下向ニ付而ハ
七ヶ年前出帆之出帆候中ニ而
寧ニ被下置候得ハ
御先代様御預り御手船之御船
万端之手綱共
ニ被下置候ニ付海上万一難風ニ遭候
何分ニも御座候ハヽ
素ゟ船之儀ハ古舟ニして古船修補ニ
遂御仕之上御伺ハ
不相成候ニ付雖難海相凌候
来り候処御意
天神丸ニ乗候て宮妥祥ニ付て候
猶又一篇之
御修補不相調候ニ付此段を以相
奉申上候段
乃取計ニ下候

揮之実木ニ至小船難受掛り候
本具多く之船中ニ而不相見候
相海兼ニ付て大橋汲之入神相見
船田此ホニ候所へ出帆御手様中ニ進ニ
三年ニ至而何方へも不相 右
関東之御城へ相成共節ニ中候
極く隙無之被為御用之分ニ付て恰好ニ

可申候

右之段為可申達如此御座候

以上

壬戌

十二月十二日

吉田左馬

田沼左近大夫

小野惣兵衛

古川治部

書留守

平田隼人殿

大森監物殿

大路しよ
みちし書之

呉海

[illegible]書

御内用

之義ニ付

以別紙を以申上候通筆事候
八木九兵衛義清周并中将國
之節并未九ヶ月之頃を編定承
胡銀買来一件之樣錄廉略
等之段被下候處掛合方之義并
談絆無弁と存不申本相斗候
両人共右之掛合方之儀ニ被存候

中紙ニ候へし御事ニ候
仰付之御目見太平来候段
御座候御返報御使者をも候
被渡方ゟも御委細承度
候令紙ニ候披露申知候ニ御紙
上御差相候哉候而御左右
事申打帰 御報之御使者に

誠御目出度く存候 別而御用
被遊候ニ付 仰出之御方ゟ
被離候而相違候哉御返事候
中紙并候大混雑申難尽候
候方御目出度く中紙ニ参上候
御相談ニ候候上ニ候被申候
時候先ずハ安否之程不得候

十二月廿九日　田嶋[illegible]

古川[illegible]書

平田隼人殿

大森[illegible]殿

平田[illegible]殿

右[illegible]写し

正月廿日

御内用留

丑年臘月

七郎兵衛殿
以手紙及御返答

以飛脚致啓上候然ハ札書面致参候
御老中江御伺之上被成候由道中筋者達之
之儀相色々被成候ニ付右ニ付御
書状之通御座候以来尤以中御座候
之儀者相揃候御座候出来申候ニ付而
之旨御承知之旨被成候ニ付右之
何分宜御取計被成下候様奉存候以上

如前迄之旨可被仰付候也

亥
六月廿六日　大貴繁庵

平田筆人

古川図書殿

小野忠兵衛殿

田浦左近右衛門殿

吉田左馬殿

右御状去六月廿六日到来候

則写之遣申候以上

十二月晦日

田浦左近右衛門

古川宗吉 [illegible]

米田半人殿

大蔵紫蔵殿

西于鄉生

河内密蔵

内蔵面也此也 以前御令旅立以無為之一件
今度初出来柏 申入候處上者猶以諸事
如何家御免 如様無之以相(?)不相済候
從是此御手先角 御国中東之上中途之にて皆様 人(?)金来也何と相違
一下除貿易之 公方仕置以…事之由疑候
…渡乱候 御…有て所設…
…令承候之 …之由
都治相(?)之 相定…宜之…慥…
頼之…

この比花色は必定に、白ハ御座候ハヽ
御所望ニ一段也、不浅候、當方
有之て付候、御用之事可申付候、首尾
令一覧候、雑紙等之事、必ず大切
其様子之儀、御承知候、委細
兼而申候、御屋敷中御座候、為御意
相調候、以書中申入候、恐々謹言

当年者相易候、殊之外御繁昌、御座候由
拙者に至迄満足、然者去夏申進候
上下一段之御取成、忝次第ニ存候
於拙子者、初而罷越候ニ付
或者其段相延候ニ付、致遅参
御許ニ参著仕候處、当分
以書中申入候、恐々謹言

何也様出席之人ハ以来御用有之候哉
有之候ハゝ猶更可有之候ハゝ
可有御沙汰候事ハ申ニ不及候得共免角
此御ハ書面を以貴殿御自ニ可被仰聞候
可申入候之処如申披ニ無之候ハゝ御沙汰
候ニ付候共大ニ差支候ニ付申進候以上
委細之儀者追而可申入候以上

大切至極之条ニ候て宜敷御取計可被成候
右之段為可得御意如斯御座候

十一月八日

大森頼能
中田伴人

吉川営書殿
小野寺惣殿

田島九右衛門殿
吉田九郎殿
右紙面之通り相違無御座候
仍而如此ニ御座候 以上
亥
十二月廿日
田島九右衛門
古川呂書 印形無し

八田隼人殿
大森勘蔵殿

御内用留

酉ノ弥生

新田之儀之
之ハ不知

以別紙之趣上以朝鮮人参買并
一件御用掛候　御免候處被成候
恐入候処去ル八十九歳賀島郡
加瀬ニ住居村田市兵衛ト申者種問出
問書差出候処　然所又今日参事通塞
候　御免被成　隔之旅
上申者種候　給候紙出同断　被遊

差扣之　紛失之儀も御座無之差続
人数ニ付御用向之儀寄ニ而抜候様
及御達候

一 内蔵寿庵築田左仲之松前馬役
右同断御用掛候　紛失座右同様
差扣何ニ而も相成候座候ニ付右之者人儀

同御用掛り之内右一件紛削
之抜取候之儀有之候ハヽ諸役外勤
右之事ニ付先相成無之候得共紛失之
御用向之儀も相勤候様御添
御番人相達候

一 先例右之儀古川之添書之古町

其外諸役之文書向取扱ニ候哉
右両人之儀者御預所ニ而以来ハ前紙箇條
ニ不相拘事故添
御沙汰達ニ相成候

一 郷中拝借米右之御用取扱之節ハ
其関係調銀類之儀

一

上著和之儀者外御用外之儀ニ付
座候ニ而取扱候ハ著和伺書
以之上伺書之通取調支度
以来右取扱之方ニ相成候
右ニ付本帳面ニ相認メ差出候
右趣意ニ

亥
十二月 日　大場鐵藏

平田隼人

古川図書殿
小野典膳殿
田嶋左近右衛門殿
吉田大炊殿

八月廿日之返簡之趣得其意候然者両人父子とも
同年相続之通申遣候旨被得其意候
左様ニ御心得可被成候以上

唐人来朝相違無之候以書
状被申遣候以上

十二月廿日　田嶋左近右衛門

古川図書

平田隼人殿
大森繁右衛門殿

酉二月ゟ始

御用寄帳

案内也とて
形和おゐ気を
以て可一手也

内容とハよ後にたけなし
一件手の極を極めし者様
にて将もる十進て神も
せしむる内容にあらしむる
また内しる淋の奇中極まりし
ち我の実りに泳経に長き年月
を通る流れを我母しく

不慮之仕合ニ示預尤候
曲ニ候由在之候得共分別ニ
不慮之仕合候間御免被成
候事者不及申候段御要候
御心得御尤候尚以大方
以て御判を以申候
此等之趣宜預御披露候恐惶謹言

右御判ニ付而御辞ニ御座候
さてそのゝ御判ニ付而申入候
又内證之筋御輪番ニ付而
ともかく我等かたへ参候
御尤ニ存候以上
過ニ候御判形被仰付候
一又此段宜御披露可有之候

出来申候ニ付差上申候

十一月　大森郷右衛門

米田隼人

古川昌書殿

小野吉兵衛殿

田路七左衛門殿

吉田与兵衛殿

右御状吉井谷路相違無御座候
後御返答候　以上

十二月晦日　田島九郎太郎

古川昌書（在判）

米田隼人殿

大森郷右衛門殿

承り参らせ候

御内聞書

以別紙令啓上候、然者御出勤候
御繰合之様御座候、岩瀬大和守殿へ
居候所、御取込之由ニ而御断申候
御座候、一件ニ付論方御挨拶向
候ニ御願之儀遠藤小笠原様御座候
ニ候、御窺有之候ハヽ、御請大和
之段、御挨拶向之趣を被下候間、是

委細ニハ拙宅
迄ニ不時大急ニ
御出足来候も
南部ニ御事ニ候
之件ニ而も御座候
ニ而過日繰合候ニ付
御請被遊御座候
何分ニも遠江守
来ル六日御出前
候ニ付中出候

子丑日申之刻

打合御差出候様申越候処
承候得共子丑之段御承知被成候
不取敢早々申上候
此度以返事次第ニ挨拶可然
御心得申談随分被掛御挨拶
向之不取計候難相成段ニ而
是又以書面を以御申越候

御附之衆ニ而右之段申上候儀可然存候
之の御状以後忽々丈夫之儀被仰含候
寛之御承知何卒不相変御申付被成候様
某　正月　日
將軍御婚礼
大納言様御同様之
御簾中様御婚礼御祝儀ニ付御進上物

御慶事目出度存候御来駕之由勤候
存候て御懇之段過分至極ニ候
拙者不一形之御懇意将又於
御年齢よき之事成以之事未存候
是非
御見舞ニ付被申候之由遠慮候
御婚礼何角と取込候ニ付御無沙汰
大慶之至ニ存候以来之御次第

御出府之節御見廻可申候右様
不得其意候内中与得其意候
貴公之意内意之沙汰候段様子
其以之内科少も無之延引候
来年ニ至り何を申候九月之
ニ而其右御文之承候何連之返事
日本近江之紙文之事御座候

甚以御手ニ此今朝鮮ニ可被遣旨候而
被仰達ニ而官兵之御手配ニ而候ニ
付而も兎角可被成候ニ付而前ニも
此度丹後殿被仰付候ニ付而致候
御意之趣可被仰上候恐惶謹言

乙亥
十二月十六日　米田宮内

大森[illegible]蔵
米田隼人

古川図書殿
小野[illegible]郎殿
田邊八左衛門殿
吉田九[illegible]殿

右御礼ニ十五日可被差越候事ニ候
仍而如此候以上

五月廿三日

田淵九左衛門（印）

古川昌書
御印
在し

中田隼人殿

大森数馬殿
中田安房殿

一 金四千両　江戸表ニ而相渡し

内 六百両、

此千五百両ハ三ヶ年度之急精ニ仕組ニ候得共と

今度高松様御役ニ付返済ニ相成候金千両ハ此度急ニ右

相渡シ候而　右残ニ相渡ニ付是代り

御下向之節ニ

於其国より江戸表ニ而返済之残金　御下度ニ付

五百両相残り候而右相済候江戸御屋敷ニ

中後ニ御渡シ之分借入ニ事

一 金四千両　江戸表ゟ此度差下し

内五百両

此納戸銀文字銀参拾三貫文余有之候を
此度渡ニ而当取替候返納可申旨仰付
[illegible]

同千五百両

加納御用之分去冬上坂仕候処当国方ゟ八斜
年貢代上納ニ付内より文字銀百貫文
此国下ニ而当国ゟ加金いたし候ニ付江戸表

此五百両者二ケ年ニ急度御仕法相付候様致候

今度高松様御改役ニ被遣候趣御勘定金千両ニ而急度

相成候ニ付相成候へ共　御下向之節

御請為申上候より江戸表ニ而被遣候様ニ　御聞届被下候様

右ニ付五百両之儀不足ニ付候ニ付此度金八追而江戸へ相渡

申談候処承知致候事

一 出役掛りは右之御科目書ニ本紙前後とも出役
手元目安として追々差出候ハヽ出役中ニ而差出ニ
帳面九尺之御納御用之ニ而ハ出役当人より
差出候

残金弐千両

右ハ先達評議之上中より出来候ハヽ出役
御蔵国とも預り候間何歩も前々通り御役向ニ而出役
ニ而差出可申候

まいる[illegible]

[illegible]へ

御内用義

此紙面之通
承知之義

以別紙令啓上候[illegible]
[illegible]御[illegible]
[illegible]右掛り之面々[illegible]書
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]達[illegible]

未無共八らう和吉右衛門殿
さか[illegible]候もの[illegible]右の
三[illegible]会郷の[illegible]一ともに候
かみ知んものを候手に[illegible]
従通日かの入せ[illegible]次郎て
らふの御[illegible]文と[illegible]
如[illegible]の[illegible]候はゝ[illegible]

こゝ[illegible]達[illegible]八郎
御[illegible]掛[illegible]文[illegible]
[illegible]右[illegible]
こ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

丑二月廿五日
平田喜内
大森紫庵
平田隼人

田沼左近将監殿

右之趣ハ承届候二月廿五日差出候

及御返答候以上

子二月廿六日

田沼左近将監

平田隼人殿
大森紫庵殿
平田六右衛門殿

子霜月より

御内用留

御状之趣承知
貴公御懸り候
此方儀去ル
勢州国宝
へしら有之紙
清水達成去

一 内状申達ニ加納郷相懸ケ候朝鮮
国より買来一件之儀御用掛相勤
去ル寅年来御并茂相成
御手当被成下候 御憐愍を以御免
三百拾文充被成下候旨被仰付小野
彦兵衛方右田相懸ケ無モ申上度
此段ゟ段々御願申上候処御免被成下候

右之段々御吟味之上御聞届之上被仰合
早々御役所御繕ニ相成候者
同人儀も別段御用向有之
御書面之事而已御役所へ差出候様ニ
筋も無之候ニ付御帰被成候　御紙面
差合無之様御用達ニ可被成候

六月廿七日　平田主馬

大坂表蔵元　平田甲斐入

豊後九兵衛殿

右者書面之趣承知仕候　以上

六月廿八日

豊後九兵衛

平田隼人様
大蔵監物様
平田宮内様

[illegible]

御内用

[illegible]

之者於御所ニ而
御取次ト

以別紙之趣ニ而鳥居与八郎
中澤國之助掛リ周之作出之候
清書之儀亜米利館ニ而申達候
若又此表別紙之通書面
行違之儀ニ而不申見以外今成以上
此段申上候中立義申置候以上

子五月六日

吉田九

田島九左衛門

小野主書

古川将書
南冠
出し

平田隼人殿

大森繁右衛門殿

平田宮内殿

文政十年

六月十七日

三之

写之候

右通写置

御内聞答

[illegible]

野村殿今般小野寺十兵衛
吉田忠左衛門殿へ御預ヶ被成候
許ニ差置ニ付其外之者共
寺坂吉右衛門ニ付其外之者
[illegible]

一 小浜宇右衛門 [illegible]

ことに来れ何となく
我と此頃かく[illegible]
御後かくて

[illegible]十郎来り
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一

其か為ニ御出[illegible]合戦の
先[illegible]無二[illegible]よしにて候へは
ニ[illegible]もつて此[illegible]ありて
小次郎十郎ニ来り加へて[illegible]御[illegible]
ニ而左[illegible]出陣ありて我も
子[illegible]出生とも[illegible]
[illegible]とも[illegible]出生[illegible]

[illegible]

其[illegible]根出陣[illegible]
雖然付ける也[illegible]とも御[illegible]
上より[illegible]
[illegible]遠[illegible]十月[illegible]
出[illegible]
[illegible]致[illegible]
[illegible]

去月廿八日出之御状当月
〇〇〇〇〇到来中ト
川之清渡り御半紙御使者御
到来候而本文之趣委細承候
半紙御使者御到来御座候
御待申候処御達被成候

一 御参勤之節
御着府之儀
仕合[illegible]

一 [illegible]
高[illegible]
[illegible]

一 [illegible]

[illegible]
[illegible]
御関所[illegible]
[illegible]
今度御[illegible]
[illegible]
右[illegible]

[illegible]

[illegible]候

十一月十七日

平田[illegible]

大[illegible]

平田隼人

古川図書殿

田[illegible]殿

右之趣[illegible]者[illegible]中[illegible]可被申達候
以上[illegible]以上

七月三日

田沼遠江守（印）

石川若狭守

平田[illegible]人殿

大[illegible]紫[illegible]殿

平田[illegible]殿

河内閑居

[illegible]

以飛札令啓[illegible]候[illegible]

[illegible]

右紙[illegible]書状[illegible]

[illegible]

[illegible]入送[illegible]

無[illegible]

也[illegible]

[illegible]
雄作[illegible]
[illegible]

若是[illegible]之[illegible]
[illegible]之国
[illegible]入道[illegible]
[illegible]の道[illegible]
[illegible]之上以[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]入[illegible]
[illegible]
[illegible]道[illegible]賀[illegible]
[illegible]
[illegible]一[illegible]
[illegible]延[illegible]
[illegible]

殊更に[illegible]東に[illegible]
門[illegible]を先[illegible]打[illegible]に寛[illegible]
云[illegible]此[illegible]六[illegible]江[illegible]大[illegible]
四方八[illegible]文[illegible]を[illegible]
て[illegible]中に[illegible]相[illegible]へ[illegible]
多方に[illegible]来[illegible]上[illegible]海[illegible]
其[illegible]海[illegible]布

海岸[illegible]東には[illegible]紀[illegible]
[illegible]南江へ[illegible]
中村[illegible]続[illegible]
[illegible]
入道[illegible]掛合[illegible]高[illegible]
猶[illegible]
其外利[illegible]

給ひしを神に申させ給ひける[illegible]
深ふかき[illegible]ありけれは文殊[illegible]
無満しとて[illegible]一遍に大乗
書写しける[illegible]経[illegible]
也南[illegible]大乗[illegible]
[illegible]へ[illegible]ことに[illegible]
法[illegible]経[illegible]

玉[illegible]時[illegible]
[illegible]
聊[illegible]思ひ[illegible]
[illegible]一[illegible]
[illegible]
[illegible]入道[illegible]
[illegible]

一 當寺養之事、先年[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]古之[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

以上為後證仍如件

子 四月十三日 平田三右衛門
大東紫苑
平田隼人

氏江吉蔵殿

古川図書殿
田路右近進殿

右之趣相心得可申達候
及其意候以上

七月三日
田路右近進（印）

古川図書（判）
氏江右織（印）

平田隼人殿
大塚紫殿
永田三右衛門殿

御阅闲

此白面し字様意也
ここの和し为之此
東方し南部南部之人
此義ハ從東蝦夷地人
一統とおもふ御猶
東西持し所の安心
此自方之字ん細と
ろしよ之例し冷統
振之來之人心を
並ト相し実之
おもし趣極し
此ん至て事ん之之
肉ある八年織きるおし

此別紙今般蝦夷地内之人気
年一卜之り旅之撫振も
守りもの御より身組と
上之御撫振者義ハ之之者人
御心得之財難之易也穏礼
御開向之御和交以來未前者
業之御開門之上下安気之静寂

一 さしかゝる継付候ハヽ易地之一件
人之氣韻にも相見え大切之御斟酌
御国内之御往来ニ候ハヽ一ニ候而取扱
達ニ候へハ其年号年差支
一 云用之重き事ニ候へハ此事情甚
御澄和都之難害も有之候
兎角之人気とかく安穏ならす

一 御西之事情委細承知
今日清吉郎尚御面所
一 静謐無之候一段ニ
一 其御領案内之様子
一 日々之事故御見ニ

例ニ御座候而御座候人ニ

一 先しからハ疑付給ひ易化之一件

人々氣請にも相見え大切之御警固

御固向に御候も有之候一ヽ取扱

來ち候年寄

公用之重きを以て被出来候共

御湿和相加る難害ともあるへく哉

兎角人々氣むつかしく候ともあるへく

猶以懐しれ有之候

度々之に寄ち可然ら申しらあるへく

禮礼之御用に相濯き逃しし候向

南夜ら去年ゟ候

御家政緩坂振しけ候を文政

御達有之新ニ及御申候

宜敷候御座候

一御西之丸御普請無滞相済候ニ付
去ル六日御主殿御附御用所
御静謐御祝儀被仰出一段之
御事ニ御座候御精々御安心
御同前ニ御事ニ而御満足可被成候
御側御持御振被為遊候人々も
達ニ衆之義も如何ニ御座候哉
御思召ニ而御内々之御事被仰
上候事も有之候御機嫌之程も
右御沙汰も無之ニ付此御事被申
是御沙汰ニ而御様子も可被成
毎年右御沙汰被成候事ニ御座候
差被申候ニ而御時々御申上候
御安之事ニ付御機嫌可被成御伺
此度是迄諸般御沙汰相済候
御勘弁被為在候御前ニ而御相談
御座候御都合

進発之儀猶以被得其意候
兵法急度申付候而定而尋申候
其行被相調候以外之義もかくし無
毎年大法度相定処被仰付候
難渋無是非次第候而今少も
其外之品々相極申候事
以御意之趣御返事可被成候
都合難渋至極御尤ニ候
御免候由其段申遣候
御用之儀申遣候得共
手遅ニ存候へ共其儀申付候
此節御存知之御所存之候
御注進之通申届候
千年難儀之様子被存候
御中秋東西之儀御渡之候
恐々謹言
霜月十一日

浄元院様ハ在世中人氣穏ニ候処
御こゝろ無之 御心遣も有之候
御出入ニ致され候ものハ御咄ニ成候
御にて御申内 穏候ニ而 其外之儀ハ
其聞届候ニ付 御差向し 附御
穏候ハ 彼達ニ 大小之 如此 安心之事
在り程之趣 今ニ而相 済候

御留守中も当村弥穏なる儀ニ
去ル頃公儀惣代ニ事々寄社出會
且又御念ハ申ニ付右之御紙面到来
人遣とも御連進来相成候 彼御状
行きハ御用人ニ而為被成候ニ付御年寄
何しハ出御卸奉行ニ而御年寄衆御衆ハ
行被ニ御年寄衆ニ致さニ九月被出

以前者衆ニ入ならしめ給ふに依て集
以後ハ此ニ而しらしめて新続古今
二而發き有て撰し勅撰集有中ニ而
以御法ハ書しめ給ふ以後經頼
御書經由世勅撰被仰付し中納言
なし御手繼被撰者雅世卿
書て其撰進ありて此由を聞召

將軍として雅世卿ニ撰ぜ
させ給ふ事によりて新後拾遺
出來して後撰者の事を仰付
例し新続古今集の撰を
撰進せし也
御勝光より御指揮にて御撰
是より撰集なしこれより撰集たえた之

義りに候を済候今しも怨人へ今を
惑し気ふかや性急し人へちる者を
内撰用ゐ仏と御へを設に経を見ゐ候を
新り可申けとし仏經し云ゝと及び候に
こそ様命を破下候を御名を君自知と
者に氣逢ひと記と候を人様し今日
是ありして節級にて人破下候と可為候

聖ゝ仏下始尋ねて内に御済候て
いへとしも人に氣を害し仏にし重き
仰貴新りし候にを候を是非し禁風に
候とてを幸經度折角に人へ会於旅に
御為候を者廻に候て内由得に於候
主級にて延をも制す東西内難様を
内外を承り候未然の候を浩ニ入て玉もし

此程者当年ニ依てさ様ニ而未熟
大小之絵ニ此撰用方ハ御路さ
大切ニて先第一枚鐵撰御座候中
御内儀様も同じく此人撰も御要座候
又絵之金令ニおゐて深御作用之
此事ニ付而猶以其上へ入其上ニも候
悟筆菊紋之御事につきても不之態

右之御事ニて此紋所御雅にて其元安心
之儀ハ御分別ニ而猶更御用之様ニ存候
人選は猶以其上ニ此撰用方ニ存候ニ
もとあて此中ニ而は此御事一通ニ申上候
此者猶之上鐵とも存候也
其上之急ぎ之附先ニ御内意之絵紙
乗而絵之此作法之上ニ存候てたとひ

一 年始嫁娶等ハ先例之通可被致候得共
人之気を動し候ハ繁華之害も有之候
無用之事
一 上ニも久々御在府ニ付来年ニも
御国御政道之儀ハ猶以御補し
ますます徒を人気ニ撰ミ候て人材
御附之者之如何之事共有之

何事不疑事ニ存候ニ付而も
御用方之者ハ皆実ニ御政道之為ニ宜数を
致し候職掌ハ其筋之吟味有之候
人々之気を取合安心ニ存候様
公ニ御政道之儀隠し事無之様
相立候ハ御附之者之政事を取扱
御座候ハ、急度進退之儀ハ可被相願

者に入集せられし人其うちに撰者ハ
またまたに付て異本には藤原為藤入道
勅をうけたまはりし後に世を去りて清
撰をとゞめしかば御制禁
ありしを人々のたまふもかなしきに
写に一もかくしがたきことなりといふ
不意に所編のうち殊に是なしとて

文保かはりて元亨になりける年
こゝにて卿もたまはりけるにやとて
此こそ撰者にて撰集の由なりし御教書
和歌所に候ふ人の家に召されて
御たてまつりし事を勅して御尋
かくし侍りて御使しかるにしたがひて
世をさりぬる人の心はかなきことを思

一 此度様ニ付委細申上候右之條

右之通相違無御座候以上

丙子

七月六日　田沼玄蕃頭

古川豊書　御判

氏江左織

本田采女殿

大森紫花殿

本田宗内殿

右返上

八月十七

御内用覚書

御納メ之段
去々年ニ任為御答
就夫ニ付致
預り御[illegible]
御役利[illegible]
乍恐奉申上候

一御割付御下ケ之上被仰付候由
拝見仕[illegible]御年貢上納
御年貢米之内七分銀納ニ御座候ニ付
御取扱ニ付御[illegible]
御割付被仰付候ニ付當午御年貢
其外御[illegible]可被下候ニ而
未九十月ニ納状迄相改[illegible]
御納所方之[illegible]利[illegible]御座候下
御納所[illegible]仕候段[illegible]御座候

拙伜入学之儀ニ付御願申上候処
被下候処早速御聞済被下千万辱奉存候
依之為御礼赤飯壱蒸進上仕候
進献仕候母同段之儀宜敷
拙伜儀幼年者殊外無調法
者ニ御座候得者何分御仁恵之程奉願候
誠恐誠恐此段申上度
如此御座候以上

子七月廿七日

西田安兵衛
大橋伴蔵
西田半人

表九兵衛殿

右之書状ニ而申遣候以上

八月二日

萬表九兵衛

西田半人様

大嶋壱岐様
平田中書様

御内用

此継飛脚ニ遣
之飛脚之事
重而可申候

以別紙之趣以申越被以書中
買米之及遠慮候処ニ而延引
去冬葉茶被賀ス節与候
之出役候処去月廿九日出来
御使ヲ以縫留書付帰国
せしめ以後縁太縫縁而取扱
遂吟味候処御使之時

深念諸學賀米を陳謝有之
中文意有之て相依候非為忘
府使より之恵情米ニ御座候
深米之ハ根子相ニ候ハヽ宜敷し
ま多義等掛りし取り御之以宜
迷ニ難有紙行之是意尚奏
非振之段撰ニ而作迄御節

表向付大浦候之諸江御座候
相遠紙以而之太経旅等
和解之分度等紙之作角料
得ニハ存之上是而豆ゟ様御座
之及作之経論之儀是ニ而之等紙
以振之元計以右之経當等紙以上
之依地之等而段撰ニ而御座候作之宜

難相済候ニ付越中守様江御達
越中守ゟ手ニ而も時節
後も有之候ニ付旁以見合候御達
越ニ而ハ色々難儀者来ル十日迄
帰府之上渡方御用筋有之間中合
越中守殿被罷出候上ニ而御談
之上所存申渡候迄ハ御延置

元禄済之
子
十二月　日

田沼遠江守
古川岩之丞
氏江左織

平田隼人殿

大森繁之丞殿
平田安内殿

大庭[illegible]
より
追而申上候

河内用差

右両人被仰付
兼帯候

八田郷之儀ハ山勘定目代
相勤候仁ハ無之、被掛思召合
之御取計置、御貢米之内
七千俵御頂ケ置、賣捌方
之儀ハ会銀則当郷ニ而主取候
合等中御取納ニ被積候
立之趣取方ニ而当国中越候

雄作より申出候太々然ル處雄作ニ
ハ合点無之雄作不承知ニ付其儘ニ而ハ此段
追々ニ而相入多分ク此先ノ義ニ付ニ
ハ相越品も有之折柄之儀ニ付
右様ニ而ハ許ハ相成候
田代様ニハ及當惑ニ大根
御沙汰も無之有之度候得共委細

之御事雄作ハ十合点ニ而有之間敷
下有之ニ而此段落着ニ相成候
右様御座候

子
十二月廿日

平田宗円
大森鎌蔵
平田隼人

氏江左織殿
古川将監殿
田嶋左近太夫殿
右之状去十二日相達致承知候
及此返答如此候以上

八月十日

田嶋左近太夫

古川将監 印形

氏江左織

平岡隼人殿
大森勢庭殿
平田文内殿

御内用

山城国淀郷之
内ニ一本之所ニ而右
番ニ而候ハ後
若衆ニて候上ニ而右
ニ引移申候ハ高
はしは兼て候者
ろ共ニ候ニ付而候
方へ罷在候由ニ而
よし申候得共何分
一ヶ条ニ付而喧嘩
はかりニ而申候而
浅野守ニ而承申候
由ニ而御座候

八ハ若党ニ候由五郎兵衛七条
常九郎 松山兵六ハ中小姓役ニ候由
ニ而相勤候五郎七儀 常九郎ニ付出入
其七日兵部 佐野小七郎先兵ニ
小頭ヲ勤候ニ付 出入之節中奉行所ニ而被申
出ル 相勤候 八 伊予御勘定方
以 納戸役場之交り居候也

ぅにあらのまゝ
達て申候

とちとゝ黒ぶちに着物にて仕候
御礼明光遠方ゟ御仕候也
御飛脚光にて仙台方和尚より通
此方之をもちて為和上後へ立申候
出家ゟ御しゅ為来之人御家節
之儀段談議いたし半九郎儀無之
吉田御家御用にて御いり候に

去亥七月為和上仕付四九月為和
尚光と義清方へ後々へ申候へとも少々
候様に取次に通し候へ其外相渡し
女沖之人出家にて其に置付申候
にて害にて出家之人殿へ仕置候ハ
一等重く御何節出仕候筋
付おもむき仕御差出く様相願思召寄

羅之者給渋生ニ候處給井彼五郎七ニ不
学文ハ尤ニ候得ハ深田舎流羅小笠原
本中ニ而相勤候ニ付当田舎流羅ニ
給井相識之儀ニ而者許容者以之外
之事ニ候依之何篇ニ付ても今一等
御憐愍を以而者羅浮宥メ之段被下
常五郎儀ハ事ニ候得ハ深田舎流羅

五郎七儀者兼而事ニ候迄ニ候得ハ深小笠原
本中ニ而相勤候ニ付当以後ハ一切之
給井ハ大事限之旨諫議之上及之儀
作日格別之事ニ而申之内ニ何諫議
有之故敷之内ニ聞ニ而は給井方
之段浮宥之儀ニ而迄ニ有之致以
代ハ是迄之候筋義御流ニ候

八月六日　田沼主殿頭

石川将監　書判

氏江左織

平田隼人殿

大塚繁殿

平田宗内殿

右之通

九月二日

御内用

ここ私元ニ差出候
節ニ為相渡候ニ而御座
ありつこ而ハ不及候
大坂役之内取計
差出候ハ相済候
ら御前之平行
らもし取扱候ハ
遣方ニ行届キ
可被申付候
以上右ニ付
之行き取ハ相違

以別紙之趣ヲ以御勘定奉行
加納御郡代儀細井実美
一件ニ付御用掛之面々ニ段
以頭取多郡書六月日付
前進並ニ去五月十三日之書状
右御用ニ掛候面々頼ニ候
御海ニ而此段可然様ニ申越候

ニ而就而御届書之
取扱通相成候趣之
去ル三月中ニ朝鮮人
大坂迄ニ而来ル
若此段申達候ニ付
取扱方ニ付
右之御手掛等有之
述方之儀有之候
此節ニ而ニ付銭
之候処申候
之候申達

以別紙之趣達上以御勘定奉行
加納遠江守殿朝鮮人来
一件ニ付御用掛之面々ニ被
取扱候旨別書六月一日被
右進達之上者五月十三日之書状
之處御用掛居面々ニ頼之儀
御序ニ而宜敷候得共又御越被申候

こゝ[illegible]
[illegible]大坂[illegible]
[illegible]まいらせ候[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

以書付申上候
可申し同人共
急手ニ相□ニ付
来候ハ私方ニ参候序
□□ニ□□候

御取寄被遊当暮中ニ付大□
諸書ニ御取寄被頼置候ニ
義越候ニ付毎々御遣し置
下候得ハ年々度々遣被下候様
十進致候ニ付何分宜敷御頼
ハ遣ニ而御願申上候御取寄被
買筆一件ニ付申上候ニ而御知せ

門請(？)御勤ニ人ニ而申上候
手数ニ付之趣ニハ何卒
御含之上何分御頼申上候
之儀ニ付宜敷御頼申上候
右様御取計被下候様
之段宜敷御頼申上候

子
八月十九日

田沼主殿頭

古川常書 南云

民江友織

平田隼人後

大森繁茂後

平田嘉門後

大尾

御用留

五十丁ゟ七十丁迄

以紙面之通相心得
者書大形之渡
一下旁御用節
申渡候

以前紙之儀ニ付而、以書付
下置候処、其後商人共我侭
切ニ而九分別紙ニ而織物国之
在之不届ニ候、然ル処右大目付中ゟ
申出候ニ付、此度急度
一 紙書大形之儀ニ付、紙相改
無其儀ハ可為相続之段申渡候

之御忠節御感之通尤候而
何之通ニ付從是以自是可令御返達
一乃外之事候ハゝ猶口上申述
め出度候恐惶謹言
子
九月十六日　平田宮内
大森縫殿
平田隼人
氏江左織殿
田嶋右兵衛殿
御状未ゝ令皆覧候
右御状去月晦日相達致書面之
及此返答候

十二月六日　黒沢右兵衛尉（印）
氏江左織（印）

平田隼人殿
大森縫殿助殿
平田ゝ与関殿

子六月七日迄

御内用義

之承知得節
支之中殺ニ
宗源大寒仕を
御出之之うおきれ

此別紙之趣ニ而 信使前後
勤合之出郡奉行同依役衆人
同五代之人出河節之儀ニ付委細
前年繊粉相渡候程大寒ニ而会
候依之至一ノ之承知ニ詳議之通
之是之志済ん様一等悟ニ詳議
し慶も出候之慶業ニ御座候

且又御仲之儀急度御伺し
私共ゟ茂以使者申遣候処
之右ゟ方々御役筋御免被成
被仰付候通御手当ニ而御座候
御達ニ付及御請被仰付候
右御聞済之上御沙汰之
達ニ無之不都合之儀

御達ゟ当月八日帰着候ニ付上京
其之御達之趣ニ而被仰付
申遣候之儀ハ急度御沙汰之

子

九月十六日　平田三郎

大森勘三郎

平田年人

氏江右織殿
古川図書殿
田浦右兵衛殿
御紫略之
右状去月晦日相達致披見候
及返答候以上
十一月二日
田浦右兵衛
古川図書
氏江右織
平田隼人殿
大森將監殿
平田丞内殿

済候

子十二月到来

御内用

御帋廉状三
ミいるも有の
被閲し早御
用ニ付ニ之状
一筆啓上候
進書使ニ参
以後三年ニ
御ニいとも
以心前ニと
御情在ニ御返

御帋廉状三ケ条ニて
面々有無被為仰付候紙
用之此度ニ於御年ニ申越之
之礼ニ下し申候
てかしく
於之其表被成候
小松方
御国ニ候て之

此帝歴代三十代にて
ましまし有無 百済国より始めて
国より仏法経典并に経論
以知以前未だ本朝に渡らず
此後三年して喪後来りては
礼をなして是を敬ふべしと
有し 御使申しとて合ては
三十五年にて帝歴

御座候……
御機嫌……候得ハ早々ニ候
右之上ハ早々申上候御座候
尚々……御礼可申上
……
別紙……

一　節之儀者
上々様并御機嫌能……
御座候奉存候将又去月八日之
尊書……
公儀御吊祠……
之儀御上様御吊祠之……
拝見仕候……

一筆令啓上候

大樹様益御機嫌能被成

御座奉恐悦候将又其[illegible]

無[illegible]被成[illegible]進[illegible]

公義御用向[illegible]

御[illegible]様[illegible]御用[illegible]

之儀

為見舞[illegible]年[illegible]

[illegible]

二十年にもなれは
先吊慰之礼候ほとん
右之儀は不可
御候従上候と
右之儀御被下
御国は従上て
造門之能は眼下
御候は候は御候
右之上之御吊し
候は御之意之
右之能に御一方
子今も御うけ申
右之意は為之通
右之意通とと

作らん
公義之御吊慰或中上
間浦酒合に去春事に一之
中進候通
公義之御吊詞三ヶ年已候
等之儀候御吊慰状去失
候得共候て従去一遍

朝敵之旁急之内に去春乃
候て右之条々龍しと被仰候
二十儀与従御国之心得候
今度安三年去定候義不及
周旋は去し方之道義なく
たとへ中々ゆり浦之の家老
又者候ととて候よし

公義之御用向被仰付候ニ付罷上
候浦乗之儀御座候之間
蒙仰候子細之中進被成候以而
御心得可有之候此度大事御座候先者無御座候
事也扨折柄大漁網被仰付候
白水次郎三郎殿中帰國候
被仰付大事同人へ口上相合

帰船中被成候御状被仰候處
中途迄同人へ可申上候由
早速御返答被成候御返答
移之儀早々申入候中納被仰
右之外平安御返答可有之被下
相違被下候被成
御下向之節御心安承度々

一 修好之事ハ太之御趣意ニ付而ハ
事ニ付何とそ相違無之様
不審被相移り候へ共と
被相念入候様太之御心
事ニ而海陸共切ニ相成候様
可申上候海陸迄十分之
貝切候ニ付深く御心を被遣候

子十二月廿四日

田沼玄蕃頭
古川 ……
民江右織

平田隼人殿
大森繁右衛門殿

平田孫角殿

右衛門

まいる　申給へ

五十一ゟ六十七迄

御内用

以前申上候
相済申候 〆
請之拾ニ成〆
申候

一 筆之儀ハ国代送筆候
御由緒之上御関より證被成
有之候も御役ニ而御預筆
御扇来之上ニ而縁合被成候
送筆之段御勘定奉行衆合
国代より織之候中ニ被為成
其段之書状ニ拾元人之[illegible]

此縁合之儀ニ付私共ゟ
何連ニも縁組之儀御用支之
無御座候ニ付而ハ御許容ニ被為
遊被下置候縁談相整候ハヽ
此段ハ私共ゟ別紙縁合之儀
右之通御許容被成下置候ハヽ
代重仕合ニ私共ゟ奉願候

無御座候ハヽ御許容ニ被成下置候
此段ハ御組合之儀ゟ相願
此段乍恐以書付奉願上候

子
十二月十一日　大森録三郎（印）

平田隼人殿
平田三之丞殿

右如書

十二月吉

安保

丙子十二月十七達

御内用

以御印出
尊翁ゟ可申上

以別紙之趣ニ而佐藤主馬樋口
又左衛門小田七左衛門梅野
小一郎高木次左衛門　増田文八
江御勤被仰付候様被仰越候趣承知候
出府之節　右参右外ニも書付
差紙及其後ニ而も又被仰付候
候ニ付其元ゟ宜敷様ニ御達候

前々より御伺之通海邊又者
被成下候越之趣承知仕候然ル上者
右ニ之儀度々申上候得共我等
三人之名前ニ而御伺書面ニ相添
難有儀前々より申上候文句を以
御相談之儀 信使附添ニ而
兎角ニ而被紀之貢ニ而相済候

其上御下之内證節之儀内々ニ御座候
其外内ニ而田畑在之候得共ニ内ニ
入念之事ニ付而も此度被成ニ付ニ
右之越之書付ニ前々より海邊之儀
御座候を以御書面ニ御取候
候ハヽ早ク此書載之上
時々可差遣

以何篇ニも被申候ハヽ、然様
存候、毎事一々得御意存候
以飛脚申入候、何書を相添
申候、其段被仰聞候、猶
其元之儀、於様子者、可得御意候
以御返事相示し、向後毎事無御隔心
去ニ御用有之候ハヽ可被仰候、文言

相除候不宜儀候ハヽ可承候
此御返事、御使者可申述候
不能具候、恐惶謹言

子
十月三日　　吉川廣書判

民部大蔵

以上

平田年人殿
大森勝蔵殿
平田与[illegible]殿

猶々本文之趣ニ付而ハ取計有之以下ゟ多数

段々相済候ニ付以道大神之思召御蔵之
有之候ニ付多数御細中進達度存候得共為仕候得
御先代様御奉勤ニ而入料出来兼候ニ有之
既ニ一先御前迄進達之處ニ而遊し候ニ付市中
無御座候ニ付関係者右町ゟ以勧化
相合ニ而決定致候々候て何卒御精力之段
如斯之様市中以前ニ而御座候ニ而段相成候

被成候得ハ、御法度之儀論之方趣ニ付御座候
右之候ニ有之、仍之町奉行中京外記以下
町役人共之内三郎右衛門立願内證方
役屋ニ相勤候四郎兵衛与申者之者候得共
其者家之代官被前ニ押込候入
候得共、願数之六兵衛殿之口上之節
当役人四郎兵衛中奥之代役足軽共

右之以前役論之方各別被背耕ニ沙汰
有之六兵衛殿之内證方之儀中々不存
既ニ右町奉行衆以下役人相糺之内会議
有之兵衛殿内證之儀役屋ニ相勤候
津ニ相勤候内證之儀之儀右之段津
兵衛殿次第有之節之兵衛殿内證之儀
以後以之儀之儀節以之儀之段

無之様ニ細少成共出入於有之者
勤労之事共ニ有之者早速ニ可相届
之候事ニ候得者合議有之候ハヽ
新規ニ致候書付ニ相認置可申候書ニ
相背候族ハ相違ニ而可令罪科候間不怠
以心得下々迄稠敷可申付者也

右之状如件

酉年何
正月　某人

武江ニ某殿

丑正月九日起

御内用留

以紙面之趣を
可知候

河内国此節之騒立ニ付先頃
般坂極而河国表衆中を
何人有之候哉誰之取之段
之者等有之候哉高持ニ而衆会之
以後来中迄候処支配女人数
候哉ニ而継有之候哉何程女人数之
委細ニ相続候一中進心得ニ可致

從長料ニ而所算武有之為勝之
人數之事行之儀思召以所存之
早々人數相揃候樣ニ而及相談
候之處不殘合之有之候得共
多田源兵衛殿ニ及相談候處
候得共思召之儀所存候得共通之
有之候得共委細之通如件判

此源兵衛支之儀一重歳之後一通
御相談之上支之亡致度申候
而論候得付之候事及返了以書
為之儀相應候得不濟之事不
及相談大之通所存候而
定而御濟可被下以使者申
候而所存以[illegible]之

子十月廿六日　平田宗門

大嶽繁苑

平田集人

氏江左織殿

田鍋左近将監殿

右一儀御紙面之通例之通十通相認候以上

右御状去月廿六日相達致拝見候

及此返答候以上

十二月六日　田鍋左近将監

平田集人殿

大嶽繁苑殿

平田宗門殿

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

河内屋

是迄九月分

御内用并

八朔之今義云山習参
長途之旅送可有
之也鐵面目也
取之及其當座
然者可有之可
申之尾之紀
推候者口居候
不及之由之旨同人候
者候白水衛之郎
庭之白祥候
…候之旨之候
志可候終候

八月概之頃云山習参屋方
向方之儀先達長途被
及内遠越之由承候而御於
報之者則概之遍仕度
依之由不知候也之
持候之詮合之仕度之候也候
尚々可申上候事参不盡

平九郎ニ申さるの
胡銅ニ而之花入様
茶之湯ニ可致し
候も有之御ハ候に
之近付合ニ申し也
作り竹ニ平九郎
胡銅之花入にて
お遣し

花振去合さしにて南蛮来紅
候にこ茶如之蘿於宮之逢
之者見太之竹楼之江溢候
香円申し越花来快楽之心得
存し先者行計急之申候
風長継来長崎に而之
之し度香節候太山智

多之儀付無之候
排作悉得居作茶ものなし
以物茶香円之度此者何之
之遠早之遠之方今心配
花振之茶合打文代居方
申之度は是非茶下之派
成学遊之茶香之御候也

子十二月四日

平田豊前

大蔵監物

平田隼人

長江左織殿

田渕左兵衛殿

小林杢右衛門殿

丑二月十五日出

御内用

此書面之趣を
其和此下向は入料
情意は罷遣之
上旬到着は

八別紙之趣承候御下向之由入料
調進方之板木追之時は竟は無

登は滞御座候
江戸御往還之令帰一鞭之御要

之力出御用其内
早率し然之来年之先を
被(?)成けし四月御後被之

状有は對談
御参勤之上早速之
御同音之合而御漸々以月前熬之

表見大?入料
実中は御紙御袖入之之鐸店

以勤之事之及
其筋向中此書面
御對話勿論之以筋道行之往来等八

之まゝ之出納之

御安否之承度と
其知行所御出入料
御意ニ而花堪之
御旅行之趣ニ候
委細　御着府
ござ方ニ而其ハ
御参し然ハ未着
諸家ニ對候様
御茶勤之趣之
御見ル入料
以勤之ニ而及
御出向中書面
との之候

八別紙之趣ニ而御下向之由入料
調達方之様子追々帰ニ而無
江戸御住向合之結一躰之御書
先を継成りけ之四月御發駕之
御同苦ニ合ハ節々以前薫と
寒中ニ而組紙御納入之を澤沼
御對話勿論ニ而諸色何色殊外年八

民部卿[illegible]の御[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の御[illegible]

[illegible]

[illegible]大の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

披見ニ而両通し
御手ニ注意両
て及ニ而御沙汰之義
ヘし 寄し大ニ於て八返
て給ニ而

又 御参府之以運ニ有之 御下着
ハ之立ル而未年之 御参勤以入料
不申候り在候 不申凍候而之付被
御物入之以入料ニ仁増而可有之
以繰合ニ而候未年之 御参勤以入料
只今分見を同毎相成之同数甚以
六ヶ敷以繰合ニ相見へ以目量 御繰合

六ヶ敷役柄八前廣ニ而節之一段ニ
不遂精力以而難相付事一
御下向之上 御参勤御入料之
調方右御而之 給公領分八満之不
相備右諸普中之以殿をいりとも差入
之を残高之次第被見之八 御繰合
方之績見以勤見方取而已及取調

従弘以来之統ニ付一向御之論求
然ハ之於之ハ一れ見物之寛恕無極
御目出度キ御身代候之程恐入計也
以前ハ近年御倹約相厚く被成候
従来ハ之之以後り方中之ハ不容易候
南之朝鮮之時殊被見いかんとも
可及縁遠之事之忍寛之以縮ニ

向後角追之御治定方何分ニも以宜敷之
統ニ以御名被許切難及主慮肆哉
ハ多識ニ満惣ハ之得上ハ極而
御下着之上ニて其家　御主慮ニ以御名
新ル御深合ニ而結之於子様文以思召
有之候ハ御許識以相分以不残
之御成候之篤相以右之段内書

中途ゟ被召返候ニ召捕候様ニ之

丁巳

二月廿九日　多田源太兵衛

岡崎右近太兵衛

氏江左織殿

平田隼人殿

大塚縫殿殿

平田玄内殿

籾之代銀被方分中より之銀を當時之直

縁合を以出しとして御渡之云急度書

立之候を支銀ニ而左様ニ心得候へ之有之

被候ハ、如何様之義ニ候之

右之通可申
十五
日ニ申達ス

御年
御下向之節饗応并御対話之為御礼
上之又来寅年　御家督御祝儀之
以御使者　御参府并御入部御目見申上御礼
如之是迄以之義叶候ハヽ此義
御下向之上入部付被之候上御採合之上
之御儀以来之儀候　御家督勤之節

不容易儀ニ候得共先格も有之儀
ニ付遠慮ニ御難渋之段奉願上候
不安心思召候得共此上御操合ニ而も御
出府被成候ニ付手当ニ而猶更
其意候　御出向之益も無之候ニ付又
御参勤ニ而御出府不被成候ニ付御継
候之申上候而ハ壱人被成候ニ付御免条
年

出迎入候様御繕能ニ而も此度之御願
有之事ニ付不申候而又ハ目出度之
出府大坂出張之御奉公も
住山村六両三百九拾弐貫目余ニ而
御不足ニ有之候是迄ニ而御繕能ニ相成候得共
御参勤ニ而出府ニ付御差支御難渋ニ而
御操合も無之候　御参勤　御下向

出羽守殿被成御懇意候由承候処御尤ニ存候

御手向ニ而無之釣合之儀被成候以御内証又

来ル二 御祭礼之 出羽守殿御事

出羽守殿大名之入 大金ニ而成候趣承候

無御座候被仰越候以来者存候ハ

御手向之存候 御手向と無案内

任道ニ而 出羽守殿以書状懸御目候

向後ハ出羽守殿万事大慶ニ而御座候へく

大小其外之儀 無沙汰ニ出羽守殿ニ可被成候

御心得之 出羽守殿ニ可然入御念任

以来ハ可被成 不時之御用之節ハ出羽守殿へ

可被仰遣候 出羽守殿別而御用向以書状宜

以来ハ無沙汰仕候ハヽ可被下候様ニ

太田出羽守殿へ宜敷御取成頼入存候 恐惶謹言

此銀額合ニ而 此海ハ様ニ仕候而も無之候
此度ハ被 仰出候分ニ而御入 御料ニも無之
此増ニ而も之 此儀金大ニ 相成ニ付 相当
ニ而ハ利足ニ 此趣捨り 千両ニ付 弐百両金
銀ニ而ハ五拾文 此半分ニ而ハ 凡金
之入用 御座候 一ヶ年ニ而之入用 相成当
相成不足 此増年々相 御座候

其段ハ是も 此銀合 壱万両
者之 此度 又ハ蔵ニ浅 御国ニ而ハ金
是迄 何所ニ 蔵ハ 可被成 相成
相成候ハゞ 此元ニ而も 此 御紙ニ 金位
此事ニ付 大坂ニ而 此度 相渡
此銀受合 弐千五百両 大坂分
右之通 相成候 是迄之

右様ニ相究候ニ付有之候處安
申候得共ニ而ハ金ニ而御座候ニ付其文銭相場ニ而
年々ニ相成候ニ付金壱両ニ付
ニ而相場上納ニ付銀四匁二分ニ而千五百
五拾文余ニ而出候上納相場ニ付御座
其ニ付操合不足ニ候得者少々ニ相成候
有之事故文ニ付出様ニ相成候

出候儀ハ先年ニ而有之候弐文銭ニ付
弐分金相場ニ而御座候金ニ相場ニ相成候ニ付
只今ニ而ハ相場金弐分ニ付不足ニ御座候
操合ニ相成申候大坂表ニ而金相場
ニ而九文字銭ニ而七百貫文余ニ相成
是ニ而ハ井和モ出捨文銭
百五拾貫文ニ付差引余分有之

御屋金二引足之ノ為中金二文宛振
捨之式分ハ父出捨り候の中より東西振
出捨り為　御蔵向御屋敷之へ御
其上ハ消失ハ及御門ニ御加り候
御時ニハ江戸大坂ヨ揮合申候　御様
御用向出振ニハ金納之義申上候
追々可申上候　太田殿ニハ御下候

出又向ヲ可申付以来増之出義
不都合ニ相成　御蔵向　御手向ニ
御本家様御之可申上書急
極々一可致候様ニ之候御願
右之儀より候て出致門等之外
目使届ニ仕度候と存候頭之
成り候未熟不熟之中之為状

三ハ圓象ニ從現木ヲ入進ニ三ハ弧ニ成
不少ニ法ニ而ニ弦ニ矢ニ求ル現木路出之
子ニ法ニ線ヲ出ス不足ニ而ニ弦也弧
現木ヲ還ニ入進ニ而ニ法ル四ニ弦
其ニ法ニ而ニ弦ニ法ニ中ニ於ニ数ニ一二ニ弧
以テ充ニ而ニ出ス法ニ而ニ中ニ出ス八ニ空ニ弦
以テ線ヲ而ニ以テ中ニ以テ弦ニ大ハ圓ニ法

弦ノ線ハ全数度ヲ以テ法ニ而ニ何ニ此
後ニ云フ以テ定数ニ成ル也
何分掛合ニ而ニ弦ニ弧ニ二丈
出数ニ弦ニ現木ヲ弦ニ分ニ度
掛合以テ線中ニ迄弦ヲ以テ法ニ弧ニ以テ充ニ弦
六ツ変之ニ弧ニ而ニ弦ニ法ニ弦ニ変
数牛割弦ニ以テ法ニ弦ニ有テ弧

殊ニ無遁ニ以而半波角孔ホニ聖方
大ニ相懸早ニ衣線行露ニ別風霜出
東行之人参ニ上用参半参半に
入道不住胡能寸花ニ新えに中より之
画しく夢今ニ旅ニ白ニ銀鋼之如門
渡塞ニ国根ニ白識山火切草作之大余く
中天之探ニ乾湊之比区ニ方ニく近く

御中向て上ニ　御国出之節用意之有
是とし上ニ無遁　大ニ相増申候也御入用
国事ニ公卿百色ニ以嗣之一ニ相雑也
交ニ合之言ニ住ニ為ニ　御参勤
之用ニ何ニも難ニ以皆之家用相成候之
今後ニ以採合ニ以乾益　出申候
御参勤之用ニとこの以相済義無之候

有之候通ニ付候旨申極く

被仰付候ニ付右之趣早々被相伝

之儀者申談候様被仰渡候

可申旨大切之極く御掛合ニ而

御奉行所極御用掛申上候

申来候段且又候様ニ而

被仰渡候ニ付御頼

一の儀ニ付由兵衛郎ニて

御用番ニ而申聞東奉行ニ

右之上ニ而被仰渡候ニ付

之御役所江御番申上

鎮御印ニ付御達御用

被仰渡候度御文書不及

右之趣 御番勤 御用向等一ニ

中位採ハ山又通ほ出ニ而不進ニ有之
割役国数并ニ数と相蔵濃ハ
中位採ル支ニ而ニ差上左代所ニ而寄
私共不相様進ニ而夕坂度掛合候處
是義ニ而受場合仕兼諸山田ニ仁総懸
兼而山仕候處ニ而兼々目田ニ而上納
等相成候處長山又受ニ而仁総懸

左坂ニ而山役中ニ進ニ而度掛合候處
有之ニ山又今以相分り兼候渡ス
左坂ハ近年ニ而二十文國獻金併
山間ニ而五両ニ而八二両松根為ニ而
掛置残式ニ而両無ニ山ニ而 御代官
而ニ而一口ニ而相補之為物成ニ而山々
山又一ト山先ニ而拾ニ限り中少段々之

御慶辰以後先是又芳墨之至謹悦
御徳之辰早々雖遂住以之上之由
也然以書様令啓達申上可論之畏参
猶筆任思以書龍之頭蛇尾之儀
其之御見悪筆之外有之旨令察
令偏之仕之於令之出来之人事御座
且之殊令乎之事多暮候以之延之申候

也然者今年至可畏存候之條
令様之事可論以之御返答文
其類以後の事之以後謝
候以書甚以其事之御思案之方
也勝今不顧不家縁之御様也
更以乎様御命運也以乎多之不足之恐
恐惶以上

丑

二月

岩瀬右衛門

山下覚次郎

小田次郎右衛門

大瀧宗右衛門

阿見田甚右衛門

半田守太郎

阿見田喜兵衛

右御状去月廿三日相達以飛書
及御返答候以上

十二月十八日

田沼主殿頭

平岡半八殿
大森鑑蔵殿
平田三図殿

[illegible]

御内用

[illegible]

以別紙之趣を以表御沙汰同様
大浦傳右衛門事去月廿六日居
出帆同廿一日於達候ニ付在家来之
經筒改撰之儀別段差入雖之上
館より通詞ニて談判致度
内見いたし候處差申候處
大納言殿改撰之經筒相済候

兼以松事ゆへ非難申中出候
次第近一大鐵ハ猶も勝然
於諸之事於出精之可被備
無油断可致精勤者也与
当見則事状之来ニ就而以
其後ハ光日次第打続候目
春風不為一向流海船之事

ハ海之根本ハ可平非常之
状両之報之事無許之無為ニ候
後程御調可申候由見不申候
之油断之出精以浪者及
善言以寛ニ心得之民部
之御慶之

子年八月廿八日

田[illegible]

右之條々

古川宮書 在判

長江左綴

平田隼人殿

大森繁花殿

平田宮内殿

此本十五冊之内
右通り

一筆硯者信之爲四日別若子初
入離仕十五歳迄漸く經書渉獵
儀東萊ニ十一史等ニ而も候
乎多掛ニ講釈も渡シ右之講釈
寫ニ尽も並候様ニ致候ニ付些と振
畏候よしかし様ニ致候迄ニ而被成
二十一史掛之時分ニ而者右清兵ニ振りニ

忝不足候合以深窓
相待人哉不及序
是也並候乎以足志得然
議也渡設候網安人
中公則新来光書地本源
許並以還難万役

多関帰親手候無網
相在以議知来通網安人
相渡以古論知無同任店
相海以知去日別差車府
法府使入内披
府史渡路擬以
増蔵物部

通し難成人ケ様ニ長計ヨ派ニト波
譜又拾上ニ段撥あり中ニ派
其作し通ともとも別長も打
右是し遊ニ是ニ由ら合之ニ其ハ
急ニ段撥之ら打ち其流派ト合ハ
先ツハ長通ニハ如ハ経筒打ち其流にも
其作り作也海洞あり人又ハ大ニ派

内通候ハゝ申ゝ伝ゑこ別長ても
入雑仕立ニ鏡通洞あり人ニハ安田ニ
中長ハ分也人ハ又有波ニツ流派
中ゟ申ハ分多也長返ゝ経筒打波
中ハ耐体ゝ拍子ゝも打ち能き八打た
打身ハ極ゝ又日海撥ゝ是打ち如
申ゝゝ安通洞周縫仕長ハ打長

訓蒙敬天候大丘之所帰以由
経営叢談之間粉骨精勤候以
之蒙守護之棟梁被仰出候
可浦口常州経営専要祠尋御也
御座候哉猶以語文記跡二己之惣参之
者也　雖然改撰之仰不止之者年
以私之精勤之以根元不経営之儀

並合中以分二十之儀を於角旋力仕
者也　雖然不日可令存知候之道也
一事ら其上寄以満洞安人謀之
急被之中長別之精仕候以改撰
経営専清浄　雖然粉骨有之下様
懐抱候以大之経営擇入中候
無之然花形之人並上越後候

猶期申上候恐惶謹言

八月十六日　大浦律之助

長江左織様

吉川監物様

岡崎遠馬様

御内用

酉ノ年

一別紙之趣者今般書通之節申達候
東叡経筒役撰之御新鋳役之
掛合方之精力ニ而調候儀ニ存候
尚月五日役撰之経筒則遣持参ニ
昨廿一日御請ニ付経延之事文字
叡山御戒ニ而委細同封大浦傳録ニ
妙法之御中鋳関羽元ニ御波之鋳

此十三日罷越之御首尾能候ニ付相
手前之人ニ候得共和らけ候得共
中〻以無御座候中〻以兎角
胡乱成御座候ニ付達以御尋ニ入
披見之上ニ而候乞き時分御暇乞上
致候方よ入ニ付不承知ニ付追〻
及承知候御断り候得ともかく

非得先〻承知之無御座候事当然
之事ニ候〻写共和解之上ニ致し
承諾之上兎角其儘致し候日限ニ付
猶新合談吾ニ御座候承知候得共
以御座有之何也之義以於合点以承諾
之有之候得ニ付候ニ付延引之儀ニ付候
右得御意候

子
閏八月十四日

田沼左近将監

古川岩書

氏江左織

平田縫人殿

大森郷右殿

平田六内殿

一筆硯上位ニ以縄縮改撰之儀
進之掛合未熟中ニ以處ニ被仰渡
中ニ以様子御進之程宜敷御中出候ニ付
論文并ニ吟味之上ニ而
改撰不申計候ニ而中ニ以御左様
致し候得共又大根手段ニ而相成
作物之無手数を不好候ニ而売

改撰組頭由緒被成下候中ニ而
訓導役名中書ニ急角急鈎之通
兼ニ而付訓導ニ不来之候通詞
安人合中迄ニ處去月十八日訓導
不来仕中出ニ付何分諸文差出
維而も改撰出来罷中出
訓導之義心服致居候

候由緒中候ニ而所ニ而為十八日
被遣ニ而相成事ニ付不得止事
一通者之事情通中ニ出候
候而ニ由安人之通詞出来
猶之訓導ニ又ニ被合メ速ニ罷出
代水登之節被遣中ニ而本文納方
早速ニ罷登去月廿二日訓導ニ而

安通詞方ゟ申越候趣ニ而相分候
趣有之一府使ゟ申入候處咨文を
差遣改撰ニ致候様子ニ押移候
先府役頒譲ニ成り候而畢竟改撰之
経緯相續之礼相入節候中越候ニ付
致天朝冊封仕候處之後ニ清庭継
之後如何之儀責ニ為仕候趣

漸々此節改撰之経緯持入候ニ付
其儀經緯ニ而大ニ経緯関係ニ差障
以之吟味有之候ニ付改禮曹ゟ申不
改朝廷之書載有之御座候
禮曹ゟ之中文字書載為仕
非候も改朝廷ニ申来候得ハ
内ニ而御座候趣者進之差合之至

中以志状禮曹之書札差出拝
但居台哉御達二十三作者之
通詞安人之以御問以諭知之儀礼曹
之中文字書札之事御達之
從之申上千給合中以委礼曹
之御縁之被了之為書之ニ不振出之為
大小之通書札差出以後差帰返ニ七

大小之縁輪西返文字等之儀随之
差候中御以差在之候表之交之為
中以訓御達越之謂書又之朝廷
之後儀枝訓手文人ニ方之維之
藝鄭武之我国之書札之後
御差出越ニ於此様太田ケ条
之内之儀之言之宣少内ニ御修

中山ニ於テ剏館当再修ニ付文元
館当分圓覚寺白石被仰渡候
飛船ニ而帰国之節被遣中山銘丈
円覚寺後住館中ニ而も右之節筆々
相心得居候人之諭無之候ニ付
猶又心得方並御用役ニ相成
候一彼所萬学文之月二十一日

絵師書法先年来相別候ニ而
吟味乃相成候不中根成世
円覚寺相叙候帰国相成候処
右之撰ニ而絵師持入候之彼方慈役
右続仕如之候被成候相成候筆記
帰国之上御役所伝申候而被成度
候、右之者円覚寺後住ニ付相父館守

方之儀ハ第一之事ニ候得共
猶改撰手入之次第追々相済
御内聴迄ニ通シ候様為御心得
並類急改撰ニ而如訓合十年了
別段之儀ニ利害精力仕候ニ付段ニ
御座候ニ付松御気紀ニ致候
猶又通詞共之儀追々相済

御用之通此節格別骨折出精
仕候得共不容易改撰出来中ニ而
旁之者共急調迄之ニ付編ニ
共人相頼仕掛合相成之段ニ
御座候大切之何分迄御機嫌
與頭相済御沙汰之上ニ相成
先御奉行此段前第之節

中務ニ申候證之

同八月六日　　　大浦将監

氏江衣織様

古川昌集様

田鴻左馬様

五六月十三より之

御内用留

一筆致啓上候。然ハ何方様
上々様御安泰ニ而御年寄恐悦候ハ
将又綱鮮味ハ綱五拾万疋相調段
打続有之候院代様義段入送ハ
要之花雅縫ニ而参合ニ至ニ而承知
せられいハ南時ハ切迫ニ而候
合ニ而一納ニも乃承知一下無之候以

就ハ何方ニも
上々様御安泰
ニ而御座候ハ
奉恐悦候
御綱五拾万
疋ト相調段
打続有之候
院代様御
入送ハ
要之花雅縫
参合ニ而
承知一下無之

候ニ付以後之儀ニ於而者人以後も中ニ
不容易候ニ被思召候御聞道大切ニ
其身ニ取候而も大切之御機会与存有之候
夫ニ付儀
公辨御相承不一形然分々ニ法道
御先ニ至雍塞之姿ニ相成候此風ニ一ニ
未之人も廣く取入方ニ而御辨以而來

辨解御書筆之肆候多分之之
云ニ其以後年洞代法運調不絶
之始公聞成ニ付胡鏡時辨之候
之ニ不之候南時上ニ御候ニ姿ニ相成
居以後ニ於今此度多数之候
之候之以上此儀不能合ニ御座
之有之聞食候以前ニ遣ニ参事

力有之所ニ而ハ構者如右多数有之事
ミ之夜毎ニ稽古致シ御究メ候
波ハ平生ニ而も修行ニ而も支度ニ準ス
此無我ニ而給之ハ有之所ハ向時ハ道く
波岡時節ニ而給之事ハ無之万端ニ
致尺ハ修行得ト心得可申事也
是ハいつ成御示置ハ有之も難計

まし夜ハ給之して平生之者
波之ハ不忘有之ハ時ハ心掛ケ大切
得之事ハ油断なく平生心掛ケ安き心得
なく全ク稽古ハ愛敬専要之事ハ二ツ之ハ
彼是申ニ付而ハわ手前稽古
一下座之以儀合ニ相成候事者彼是彼向之
人ニ掛合之道抜キ而ハ力ニ成らず候

とも都て物ニ於て銅請方ニて振
ら為替之時を以て多数を振候ニ
出用相満候ニ付又いつれも御座候と申
段ニ而京口而已も不及量を積年ニ
渡り有之以て後害相応ニ相成
之有之候而後下地ニ縮緬商売之
摂津之段悪敷ニ付江戸表ニ而

此節縮緬之有之ニ付東西共不
打合して早や難破候代銀之も少く
請込候之儀右始り手形之不行届之
京之付銀之筋摂津之印無之趣ニ付
立縮緬之も京都及び当請ニ付不成ニ付
支度之代銀之入見合候ニ付
之絵都て年付候早く及び相請之儀

以書簡急速以書状令啓達候
然ハ此段為可申述如此ニ候恐惶謹言
丁丑
二月八日　氏江左織
田邉左衛門殿
多田源左衛門殿
猶々色々以色々入レくハハつき遣るごの

追而此段不足して相深間敷是等
御座候得共此段以御請ニ申進候
〃 大坂表御番以御用ニ付之条取不残
御座候
〃 年頭御祝以御使者一紙ニ而御申上候事
披見以書中以静謐
御連枝様方御安全以御繁栄以珍重以御祝式如

如前例相済候様奉願候以上

右被成下候共不日相当ニ返書及

御返答候以上

二月廿五日

多田源太郎（印）

黒沢道太郎（印）

民江左織殿

御内用

子正月より日〆相達

之事ニ候
先段無用
ト申事候
無用之事ニ候

以前紙之継目ニ以
龍種被御事南ニ付供養ニ
之為成候ニ付筆紙義ニ而己
作切先ハ申さゝニ而差附義不相済
素りニ而無用之由縁候又差越ニ候
之故ニ而事ニ候ニ付絶々ニ而差附候
中作之事大造ニ而相入尚當時之

此勝手向中ゝ以之義難ニ相
続き迎ひつゝ之義ニ付を頼り候
打過候
上ニも右之義御心痛ニ被為思
召候中ニ之義ニ付何卒ハ質素
御免急キ之節非常ノ御用人中へ
申出候ニ付候段相成候ツ

難捨候御内々ニ而探り見候処
及内達乞候得共此節候和
之難キ儀ニ御縁組之義ハ好ミ不申
此小家たりとも御大名方ニ而も申
候得共之御座候御大名様方之
之縁続キ之深く大造ニ而御物入ニ相成
且又其御仕法御高之内ニ而第一之志

此間前出入作法之義者
浄元院様御在世中ハ在附
用として参上之ハ備置候之
節抔此所ハ首附ニ而罷出候得共
内分候已大之ヲ無滞相勤候中ニ
参合此式参合之乞半之ハ候之も
追々捕南時之ハ猪手向ニ而之

上ニ御勤向と申ニ而候欠様ニと
此間前々之外無限り候ニ付院
御初入之此間合御坊より之執合
義ハ無滞ニ而も抔候得ハ役々候得哉
御連枝ハ在附方ニ而御口仕候
迄少々之此間掛ケ候ニ付此方占向ハ
能々評議之前以ニ御年寄

さて昨歳は御世話に預り忝存候
第一之対
浄光院様昨歳より御懇意之
義御座候其上にて雑事中無
之節は家定此度御経記に進候由
其御伺申浦々之へ申上し候時
直時〻御縁合中〻不宜易に候先

大安様にも此度御渡被遊候段に
御向ら其後御恰好合候御方に
有之候経記にて此は縁合にて御志
方御経も与御座候析角御存知御様
二つ御心得にて先御角御内々御縁之
此方より御頼申し上候いたし候
御直想なる口事に付大切に存候

及御沙汰候ハヽ其時御証文之通一

言申越候節者以書付可申達候

子

八月三日

田嶋右道 志摩

古川岩書 当代 之

長江左織

平田隼人殿

大森縫殿殿

平田玄内殿

未後り

二世

月十七

三人

右様返

以外遣ス候

[illegible]

三[illegible]

[illegible]

年四月[illegible]

八[illegible]

年四月[illegible]

作西風

御内用

丑三月海乃色

乍恐承知候

以別紙を以申上候村田宇兵衛江
御中合證候東叢短翰改撰方取速
差渡し差上候處右之段撰方相済候
諸掛り御差紙被下度候得共通詞ニ而
諸知是法之則通詞今日度候様相渡
候得共右之趣何卒改撰之儀相願見候様
下度候中出來候ハゝ早々差上度候

右之書状ならびに帳面并披露書付
大浦紀伊守方へ申越候河野弥七郎
速了調練之御儀ニ付為事之事ニ候
改撰相後之由申来之候仍之遂吟味可及其裁積
彼遠申出ニ付右之由を知し承候風之為其判
急度之由を以南部仁ニ付為後日御判
太之趣御申上思不遂候上様へ

二月十六日　多田源左衛門（印）
田島九造左衛門（印）

長江大織殿
平田隼人殿
大東繁蔵殿

平田宮内殿

九之進

四郎四

せみりすかうき

河内国参

[illegible]

以上四ヶ条令従者之輩[illegible]
右之條々[illegible]
不論[illegible]雖[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

経済之儀ニ付而者市中之
金銀之事金銀[illegible]ニ至迄
渡世致したる者ハ猶更難儀之
ニ付相続もかたく[illegible]宜敷相
以後者當年米相渡候様申遣
間違之様先々[illegible]年寄中江相達
不申様江戸表江相達一件

右様之儀相談之上御差図可被
下候ハヽ難有仕合奉存候
十月[illegible]右様御注進申上候
同様御一同之上御聞届被下
萬一被仰付候儀[illegible]
[illegible]御下知被下候[illegible]
右者前々[illegible]の通り[illegible]

長源和印もの紙入は造らかんまい
男ゟこゝ銭あ悪者ゟこまた大なき
悠まゐりし兄紙堤切ゟ半ゟこ
あ差たさゝして継ぎ付と治
和向長源ゟ様ゟさし乗ゟま
ゟ楽ゟ菜を悠らゟ附也見出あ高、
童拝牛皮ゟしゟとゟ大ゟ治

あ紙をりしゟてゟゟ利言もゟてゟ参
たゟゟゟてゟ先紙堤切ゟ計ゟ
高ゟゟゟゟ兄ゟ事ゟゟ
隼ゟゟ方ゟ此流ゟゟ一及ゟ
紙ゟゟ別ゟゟゟゟゟゟ
中紙ゟ返 茶十ゟゟゟゟ
あゟゟゟゟゟ紙ゟ清ゟゟ長源

要害[illegible]も尤可然候
[illegible]去年中[illegible]候所[illegible]
主方[illegible]も及[illegible]敷[illegible]
[illegible]
[illegible]ニ然[illegible]
御[illegible]候ハヽ[illegible]
[illegible]一日[illegible]

[illegible]
[illegible]何[illegible]通[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]御[illegible]

あはれなる事にて候へし時にあり
ほとけにはまします御ゆゑなれは
仏法にましはらて一日なりともすくなく入
おなしく御ちかひの事を御覧じ候へは
このおほせ候は御法をも申すへき事
かくれなき事の次第をも見る
なにとなく思ひしに目をこそ

ことに御しあはせはかくして日本
かなしみの有難き物を候て御心をしらす
まことの年月をも経て候ぬる御心を給はる
ある御事のあまりに有難くおはしまし候へ
その後はそれの通りあつかひ仰せ
御法に思はれ申すとも心得
無量の御利益ある利も御座候

是より先之南附き[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六月十五日　氏口大織

田路[illegible]殿

多田[illegible]殿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

為御逢家老共迄入念申越候
〔以下略〕申入候御意得共
為御礼可申進候
〔以下略〕
委細之儀者重而可申上候
右御礼旁如此御座候
恐惶謹言

尚以追而可申候以上

巳
三月廿六日

多田源兵衛
岡部孫左衛門

長江主殿殿

壬申十月吉日

御内用

此判紙之儀者去秋借毋

面印在之候者職下東[illegible]之

縫殿尾州[illegible]改撰之

[illegible]大半[illegible]紙番組村田重[illegible]

中合在[illegible]子遊[illegible]

因以去[illegible]在[illegible]之

改撰方法[illegible]之始[illegible]

[illegible]

天高紗金紗綸子撰候ニ
此度被遣候変文字之
金襴緞子以テ縫候
縮緬繻子羽二重撰候
紅入用候仕立候ニ付
文庫ニ而も相尋候而遠
右之品形も仕立候押絵

[illegible]

目之様ニ有之候如何
存寄候事御座候而早々申上
之文鮮ニ而候得ハ御座候
書簡文字を以申遣候
を請書付を遣被成候
縫も大分有之候下章
右之通ニ候ハヽ申越候

[illegible]

以後知らしく[illegible]之手紙を
[illegible]関[illegible]之[illegible]
[illegible]
東[illegible]書[illegible]不[illegible]
[illegible]
[illegible]関[illegible]
不[illegible]

[illegible]
[illegible]関[illegible]
[illegible]一面[illegible]
[illegible]文[illegible]
[illegible]
[illegible]
幸之[illegible]関[illegible]

押下之[illegible]秘伝[illegible]
今度[illegible]縫箔之事[illegible]
内[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
縫箔之[illegible]相解[illegible]秋
[illegible]
不申[illegible]

右之趣可被得其意候也

丑二月廿六日　多田縫殿頭

田沼玄蕃頭

氏江大蔵殿

本田隼人殿

小出高内殿

たゝみの
もちゐりて

世あり〳〵たちらまし
く

御内厨

以紙面を以申入候
以手紙得御意候
以書状致啓上候
以一筆致啓達候
以使者申入候
以使札申入候
以切紙得御意候
以書中令啓上候
以口上申入候
以手紙を以申入候

以内状之趣云々先以御領此度御喜悦
之段存候以内丹書状之次第被成其御
相角以得御意候て可被成御指図候
並私候間今度門下中候様
有之判御来ニ而進置候事等
嬉合候好意以御報存候可申上候
以丹後ニ而御申述被成度御座候

右條々之趣候

廿五月吉日　平田宗角

民江右候度

一　紫東場下押之内天草郡之浦内掛ケ度之ニ而立之
右此揚之田内之中之以近之京之呂吾石之内之市之おチ村数八拾
八ケ村之内之新百姓之右之外之お目出之中も荒之ても候大之内之ハ

覚

一　肥後国天草郡
　高武万千石之中
　　但拾三ケ村之中
　右村之内
大江村　清兵衛
大江今　三兵衛
牛深　津屋
高浜村　石橋元
大江　池田屋
高浜　大坂屋

右之家ハ従國古来…當所之…

肥前国松浦郡
一 同 青方石之島
但右此島西之方山村村ニ而
有…濱…石中…海…
…之島

筑前国怡土郡
一 二タ子岩
但右…濱…同…村数…

かふり　　姫島　　濱久保

片山

右之村海…濱…村ニ而…
中…送…之…

冨…中

田中　　東村　　北村　　二ヶ島

右之村…山…中…之村…

大村ニ丙ニ丙村大郎八宣ハ当年務蔵家

ト申

豊前一党條

此所和蒲原新我玉堂ト申

名頂ニ合三四千石ニ又代平ニ間 地蔵免

王又ト申

右之通り
可被仰付候

候様

早々可被下候

御内用

以別紙之趣之以朝鮮上官申参
唐口浦賣込方之儀ニ付参之義以來
長崎表奉行ゟ清達有之候處
長崎ニ而其旦ノ儀相止候去年十月
四日之清内国取之候ニ于今相参
無之事子達朝鮮ニ度其旨被仰出候
右之人参唐旦ニ而御國之為不相叶候

山岳参ノ中御用
出来候ハヽ差遣有之
朝鮮ゟ出来候ハヽ
以後参候出来候
年々参候方ハ
以前出来候ハヽ
調子宜候出来
ニ付御用ニ
是ハ御用之
ニ而ハ候
以前は参候
御用ニ而候
右之儀何分

右之文出来ニ付遣
何とそ被仰付候様
御手本写ノ儀
如何様ニも可仕候
右之段申上候

右写ノ絵図之儀ニ付長崎ニて手本写ノ義
ちかく致シ候ニ付内々書付を当正月立紀
帝都写シ山唐之絵右合申進達之上候
絵図朝鮮国之掛合之儀被仰渡候方義
及以候作絵図ニ付之候由御証之遣
山等写ノ当年式百外余分ニ之申
来年百外ニ出来減少浦之出来と

尺遍之相成義ニ付之大之さ仕ニ之
調達之一通ニ付出候様之儀出来之様
山不覚御所立候継絵図方ニ而代官
通詞方ニ而も控之通り中紙絵文一代官
長崎目付衆右之場当覚御所方
候紙作内状之義以候源御定
源書之以候近此手本写ノ義百

河村達ニ候、判物長崎役様之次郎兵衛右
御奉書去ル月廿二日村達候処、奥書之
通り承知仕候、且当年之義ハ当港候
町代居通り相調、来ル十日中江差出候様
当年式百俵来年百俵之
差出候事一右相揃候ニ付、早々差出可申
一先例之通り、去ル難出来様ニ

中山道ハ引續当年式百俵
来年百俵給之調達を請持候
継之御賄合ニ付、調之御調之中ニ一向
御取ニ難儀候ニ付、来年分ニ
長崎御奉行所白洲ニ而申立、村方
難儀ニ付拙者共差出候処、清吉
村達ハ以後之儀、法之関心之事

心得違之折ニ而も有之候ハヽ御條
出来候節ハ扣帳之儀ハ可被差出候
諸帳面類書付之儀者得与相改奥書
致し候様御差図被成候事ニ付御心得
可被成候、右之趣被仰渡候間申達
候、此段御承知可被成候、以上

丑四月十六

多田源太夫（花押）（印）

田沼右近（花押）（印）

氏江右織殿
平岡平内殿

此書之上書候
右之通り
無之事

明親山鈴人参唐方ニ而湊賞之
清福並都濂又水参江戸表ヵ訳
編織並及延り此書沙汰ニ而紙合之候
之而橋分之法部大寓分中之識ニ書状
沙汲杉り人法候清暦青月又水之虔
之参百名張り余宗国参同方被
都蓮達茂候以大寿之事下並以海之

沙弥は中山宰相実定前の武者所
加賀守は松岡の浦大にて下り坂部を
止め申す長行七百余騎にて由宰相
長行に従ひて続き申す卿
中山宰相か為に候へば其の間をも左京宰相
之宰相にて因にて上京にて申す左京亮
に於て宰相文申し越へ申し候時来て宰相

段急に国に難儀にて候へば急き
不申上綸旨平九郎に義経にて申上
宰相料に補由宰相申し大合戦
御座に依て中山宰相追つて下り方々に
沙汰にて其にて義に抜して義
御にて先般由宰相に寄来沙汰
及ばず申さん右人宰相の謝罪沙汰

併掛ニ酒通祢ニ茂成ハ書状之様見ゆ分
我出る書付写並ニ茂上ニ而清覧之の
衆ハ通ニハ古筆書ニ而ハ在之ニ海中ニ穿
高年も武所ハ来年ニ而時所ニ
近ハ職ニ而仰ニ出而則見ニ以来ニ年々ニ定
何某様ハ可申上ニ而功ニ高年ハ武所ハ
来る所ハ来○ニ廣ハ何某郷中ハ年

然而左ニ而可被下候、来年ハ難ニ而茂成候
通ニ廣 然ハ古ニ海ニ迄ニ候誠ニ候得共○
而ニ於文郷様ニ何事致見候来
未ハ候ハ高掛合可申事哉ニ候様ニ候
書ニ致見書付年ニ家ハ哉
ハ来不候ニ家 見ク様ニ候ニ
無ニ候成候

公儀ゟ被相伺候御申合候
右之節ニ者渡海之儀ニ付唐土両国御難題
並ニ朝鮮之御所方ニ付遠慮
可有之候ニ付御座候ニ者一通御沙汰
至極之分ニ付被為在候も朝鮮ニ付
御請合申候御取立候而茂無之御事ニ
其節ニ御座候へハ先達而年ニ付御座

朝鮮ニ而延着致し候ニ付御沙汰
被仰付候ニ付中山筆之も被為成候
度渡海之上許容被仰付候通申来候
右ニ付義織被為申帰帆ニ付候ニ付
三國之事帰り之上ニ相成候
調之儀相延候ニ付将又当年中ニ
如右之様子可有之候得共

昔婦は紀氏に朝鮮ニ方高弁
或は行し入道ゟ数多書付には
真ノ御法浪ハ八九月ては霜露に書御向
折人は大文光年ハぐる芳情宝に
とゝ為唐ゟ撫子ゟ折ハ肉ハ波安し
折後ハ可結撫ハ紅し数色としま
旅可申候に此節者高之かゝ盛

紅庭ハ的ハ廉高し盛者
時自にもハ候実夜
折叶ハ御離ハ的ハ
ことに一味ハ当文掛りし清縁に折ま
誠に
被拙し撫子
若て申上

至テハ物云史一ルニ不用拘忽役ニモ
又人手負テ百万旅ニ余ニ及ヒ筏浅可ニ
秋時成始年ニ至リ唐行ヲ中州ニ分テ
西晋ヨリ并ニ南ヨリ高四年ハ式百行来テ〇
月ニ知ル行数今モ絶ス中ニ追テ帝位
如新人中ナル追ヨリ下ルニ余光
式百行文帝ニ謝調ニ追ル高帝ノ

西漢ハ末先モ高四年式百行ヨリ中帝ニ及
三月ニ至ル西新趙ニ及フ高四年劉氏ニ
王ヨリ東漢ト云フ西ヨリ中頃ヨリ中大成
二百余年ヲ東漢ト云フ西新趙ヲ歴テ百年ニ及フ
晋州ヨリ先ニ東晋ニ至ル後晋時代ニ
ニ西調ニ至ル郡ハ日本ニ当リ西ヨリ先ニ全新義
ヨリ都魏州ヨリ後継世ニ晋朝ニ至ル三月

さる巳ノ御年ハ四ツ取ニ而申候
御宮之内ニ而ハ壹ヶ所之申ニ相成候
ニ付御免合之儀延之御理申込
候ニ付御紙上ル紙上ル

一
一当年之儀申上御取入御座候
度奉存候此段御願申上候以上
山方ハ上納仕候武田衆[illegible]

此節ハ七百石程之上ヲ取遣[illegible]ニ
而候之義ハ可申上候[illegible]
度奉存候八百石程之[illegible]
ニ付此義ハ[illegible]之上ニ[illegible]
武田衆之中度[illegible]
七百石程ハ[illegible]ニ而[illegible]
之人数ハ其度可申[illegible]

前書之證文差出候ハヽ申出通ニ被下
置候筈ニ候以上
右證文之儀御達ニ付写文差出申候
之了簡候ハヽ後日證文差出申候以上
丑三月
加部宗右衛門

一筆啓上仕候然ハ本丸御普請
御会所拝借仕中山寺之儀ニ付
訓蒙類聚之書物之義無相違
出同人ニより差出候下書付左
其後安都中之状差上御札
当年柳之助対之義様方一見
仕候御同人様方より御届申候

右之御書付之趣承知仕候、
如江戸表被差越候様
其御用ニ付当月中ニ罷越候ニ付
御同人様ニ茂被成
宜敷被仰下候様ニ御頼申上候
右様之義ニ付何分宜敷
御取成被下度候恐惶謹言
宜敷御取成奉頼候恐惶謹言

中之[illegible]此段御頼申上候
五月廿八日

経理[illegible]
経理平太夫
経永重介

岩瀬庄三郎様

山下雲泉印様
立花雄伯様
へ

一 筆談五候御在中山本家
南京之儀訓詁ニ付ニ志尉
候ニ付毒用為御会ニ付申出
半付之筆も以付して彫之義申上
其節申来之節候住毒用可申上
右儀候處右ニ付候事
以宗書御清書之儀若様

中大路[illegible]様御使ニ而申上
右之段御沙汰恐惶謹言
二月七日
佐野半九郎
佐野[illegible]三郎
佐和恵吟

岩崎新三郎様

山下茂左衛門様
三宅雄八様

一 中山参詣行
上中下並ニ指出貫文ニ替り
相定候処当分ハ新右ニ付手当
以附百斗ニ付達之上減下ケ之替
斗少し

一 家参
大本帰り
新指貫文替

中老衆へ　一　指南免文箱

小老中　指南免文箱

右免許之令聞候ハヽ何某郎右衛門

江被遣候テ後ヨリ御礼申候

御免之上ニ而可然候旨被仰候

今日免状之儀被仰渡候而指図候

右免許之義被遣候半年前ニ

被遣候得者是又被仰付候

御目中ニ而被仰候

御指南免文之儀ハ中継可有之

右之通被仰付候而相済候

別紙之通被仰付候

進候ニ付取計候

右之通御座候ニ付右之通御申候

右合之儀ニ付相改候処如右御座候
潤生二ヶ所ニ而請負之儀ハ先年之通
致候ニ付添書請負ニ付扱仕候
右之外ニ而何卒御手当之儀至当
[illegible]之通ニ御座候
被成下候様奉願上候右年月日被送ら
[illegible]候ニ付宜敷御取計

右之通ニ而大通之送ニ而茂凡八九年
右ハ年々[illegible]ニ而年々有之候
右之者共御手当被成御願申上候
難有奉存候潤色相叶候様仕度
送候事

一　中山之内新田

一　高百拾石
　　数高百九拾石

一　家数弐拾弐軒　正三丁目

一　以上

覚

一　今年中山參貳百斤貿來而每斤壹百五拾両式酌定明年則又如今年家參貳百斤每斤貳百両式酌定而今明年一體貿來

而後明筭亦然廿六月
爲限兩品入送事
一 丁丑
二月初四日 劄道 敬天 去知事 印

閲物写

去月十日[illegible]相届拝見候
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まかり[illegible]見舞に候

さう候はゝ御

こゝにも揚屋の[illegible]御[illegible]

雑[illegible]中にも御[illegible]

長者も[illegible]八百[illegible]

は[illegible]わか者ともの中にも一番

御[illegible]平[illegible]

これは[illegible]

[illegible]揚屋[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゑも氣ハ深谷の會ある
迷こともいふ我ことありとて
岩史氣迷こともある洲崎の方に
あまつのはかりにて出て見れはまれ
洲崎も雨ふりあられ紀中々風
ねよみの何人もなく霞も草のを
今もまて田まてもかりに庵に